志士本好千座

中野幡能

はしがき
一　千座の祖本好善勝
二　本好氏と千座
三　道生館に入門
四　祠掌に任官
五　田尻騒動の主謀
六　共憂社の設立
七　西南役「中津隊」
八　「先陣ほき」のその後
九　千座の遺芳など
附(1)本好氏略系
(2)本好千座年表

はしがき

明治維新は日本史上の大改革の一つであった。いうまでもなく幕府を倒して王制に復古せしめたわけである。しかしその背後には、幾多無名の志士仁人の輩出があった事も忘れてならぬのである。同心同苦の志士も一度臺閣に列すると、必ずしもそ

の初志を貫徹し得ず、明治初年の政治、外交等々は生残りの志士の心を満足せしめざるものも少しとしなかったのである。例えば五ヶ条の御誓文（明治元年三月十四日）の精神により、明治六年参議木戸孝充は帰朝後憲法の制定を建議し、次いで明治七年には民選議院設立建議が副島種臣・板垣退助・後藤象次郎・江藤新平等の連署によって行われたが容れられなかった。又明治六年には征韓論に敗れた西郷、桐野、篠原等を始め、副島・後藤・板垣・江藤等も袖をつらねて官を辞したので世は騒然としてその去就に迷うた。而してこれ等の人が憂えたものは、優弱の外交、国権の失墜、私意放縦、民権の剝奪であった。即ち維新前の志士の画いていた新国土建設の理念とは相反するものが多かった。ここに不平を懐く者が澎然として起ったのである。

こうした社会運動の一連にあって長州の前原・肥前の江藤・土佐の板垣・薩摩の西郷などと連繋（けい）を保ち奔走した一党がある。即ち中津共憂社であり、その一人に本好千座という青年がある。

千座は豊前国宇佐郡長峰村赤尾祠官本好氏に生れ、弱年の頃より尊王愛国の精神を鼓吹し、国事に奔走し、西南役には中津隊に投じ同志増田、岡本等と共に明治十年六月二十四日赤松谷の戦に於て打死した。年二十五歳（満）である。

いま、千座の生涯を回顧し、資料を集め、伝を綴らんとしたが、歿後七〇年、子孫本好家没落の為その家もなく資料も四散し施すに術なき状態であるが幼い時から伝えきいた事など捨い集め且はわづかに残る関係資料を通じてその伝をものし以て子孫に伝えかつは千座大人の霊前に供せんと思うのである。

昭和二十一年九月十七日

一　赤尾村と義人

千座の祖本好善勝

延元元年九月十八日後醍醐天皇の綸旨は九州の南党に下り、征西将軍として懐良親王を派遣さるべき旨を伝えられ、同年十月親王は御潜行により叡山を発し、大和・紀伊・高野山・紀伊湯浅港より上船鳴戸を左に由良を右にして瀬戸内海へ入り、讃岐路より伊豫忽那島に忽那義範に迎えられ、三ヶ年形勢を見て九州征途の準備をした。この時の「供奉人十余人」は五条頼元、中院義定、四条義基等であるが、この中に田辺善勝が入っていたと伝えられる。

善勝は大和国吉野に生れ、その先は田辺宿禰・即ち神魂命五世孫天日鷲命の裔であるという。その伝えによると善勝幼より勤皇に志し十九歳にして左衛門尉に補せられ、親王、征西将軍に任ぜられるや、選ばれて供奉の一人に加わる。興国元年三月豊前国柳ケ浦に上陸し、筑紫路より肥後に入り、三年には薩摩島津貞久を討ち谷山隆信の谷山城を発し薩摩山川の港より肥後宇土に上陸したのは正平三年正月二日である。正平六年九月には九州探題足利直冬討伐の菊池軍に従い、同七年二月二日の南針摺原の戦に参加し正平十三年には九州は全部宮方となったが、十四年春には宮に叛いた大友氏時を豊後高崎城に囲み、仝年七月十九日の筑後川の戦に参じ、仝十六年七月には宮に供奉して太宰府に入る。正平の末より文中にかけて重臣も歿し、建徳より天授にかけて漸く菊池氏も衰へ宮は矢部に隠退され、宮を供奉し貞和三年三月五日、馬岳に入ったがその後益々南朝は衰え元中元年に干戈は収まったが、南朝復興に種々と謀ったが遂に達せず応永三年、池永坂の戦の時宮に従って討死した。年八十八才、そこで子の善政は遺骨を、赤尾村に葬ったのが現在の吉地墓地であるというのである。爾来その祭りは旧三月十日に絶やす事なく現在に至るまで子孫が奉仕している。

当時赤尾村は赤尾氏が貞和中光岡城を築いた。赤尾氏は北朝方であるので、その名も秘したのか善勝の板碑は無銘のまま六百年の星霜を経て現在残っている。本好氏は赤尾に隠遁してから改めたともいう。その子左衛門大夫善政より曾根宮祠官に任ぜられたと伝えている。

善勝以下の墓は板碑、石殿、五輪塔等で累々としている。

註　本項は本好家伝承を中心にして書いた一説にすぎない。

拙著『八幡信仰史の研究』第一部第四章、第四節中世の「宇佐神人」を参照して頂きたい。

二　本好氏と千座

本好千座幼名一角又は一学通称千座諱を善隆という。本姓は田辺宿禰、先に述べた本好善勝の七代の孫善治の時二男善行に分れ、善行十一代の孫を千座という。

代々本好氏は曾根宮大宮司であった。その祖善勝の遺志をついで善政は赤尾に蟄居し南朝の再興をはかったが機運をつかむことができなかった。「菊水」「桐」の紋所は西征宮に賜わったと伝えている。

二代左衛門大夫善政は祠官となり赤尾村の諸社に仕えていた。当時曾根宮は既に鎮座していたと伝わっているが、その縁起湮滅の為に明らかでなく郷土史①では慶長の鎮座になっているから、その時代の詳細を知る事ができないが、江戸時代赤尾村の諸社に奉仕していたことは②事実である。而してこの頃宇佐宮に関係していたが白河家についたか吉田家についていたかは明らかでない。善勝霊神の祭りを共にする『平姓園田系図』によると

園田左近太夫平基房は永正天文中大友義長・義鑑に仕え義鑑の怒にふれ知行千百貫を召上げられた為宇佐郡赤尾村に蟄居していたが基房三代の孫正房は慶長五年領主細川忠興の命により神職となり佐野村春日大明神を奉守護、同六年上京従五位下常陸守に任すとあり、次の正直又元和元年上京従五位下美作守に任とあり、正直四代の孫正重、元禄六酉仲春上京於吉田殿任官し爾後皆吉田神道に属した。

となっている。これによると、豊前国では神祇伯白川神道家に代り、吉田家が勢力を拡げ始めたのは元禄の頃からで、この地方の郷村神職は吉田家に裁許状を受ける様になっている。

元来宇佐社人は鳥丸家を通じて補任が行われたという（清原博士『神道史』）。本好氏は宇佐宮に属していた神人で村の鎮守の社司職と宇佐宮発者職を帯していた。いずれにしても近世には、本好氏も宇佐神人であると共に徳川時代元禄の頃から吉田家に属する様になったようである。

寛政、天保の頃の神道管領吉田家の裁許状が残っている。このように吉田家に代ったことはその思想的な信仰に代って来た事柄がうかゞわれる。即ちたゞ奉斎の神祭りのみにあきたらず、神道思想の実践的霊力を欲する、神の宗教化を熱望し始めたものと思う。二豊の吉田神道化は元禄の頃からが多いとすると十一代善重の頃からであらう。

吉田神道は唯一神道と自称し中臣以来伝えられた卜部家の家学であったものを、兼但という。卜部家きっての優れた学者が輩出し大成されたものだというが、その特殊な点は神儒仏道の融合思想であり、反本地垂迹説に立却した神道である。従ってこれには真言、天台の神道に影響され又日蓮の蓮門神道にも多大の影響を与えたといわれ今日見る、宗派神道の一段階をなすものと思われる。しかしこれが日本の神社神道に貢献した点も見逃してはならぬ。

斯の如き神道信仰はやがて十五代越後守善直（二男の長女）の孫娘かねによる稲荷講社の創立と成り、数万の講員を有するようになっている。これに反して徳川の前葉より起った復古神道派の国学が漸く地方にも浸潤して来た。本好家にもまた国学研究が入り、主として平田派の著書を読み始めているのである。千座の祖父右近及び父求馬はその文庫に平田の著書を多く蔵していたと伝えられる。

千座の父その幼名を千座、又は求馬、諱は善睦、播摩守に任ぜられ多くの弟子を有している。母は豊前国宇佐郡葛原村吉用太右エ門の二女で嘉永五年七月二十一日炎熱の夏、赤尾村曾根神に長男として呱々の声をあげた。父求馬三十一歳母いと二十歳の長子である。次の安政三年に妹菊が生まれ五月十一日に死んでいる。続いて安政四年六歳の時祖母花屋が歿した。花屋は中津藩士某の女で当時豊前国下毛郡深水村に住んでいた。祖母の死後妹よしが生れた。その間一人子であった為に、家中の寵愛は想像に難くないのである。

註①『長峰村郷土誌』第三編第一章第五節二五枚目、村社歳神社、将ニ慶長六子丑十月初子日鎮座、祭神、大年社、御神社
②横光源左ェ門所持『赤尾村記録』中の「赤尾宮本好氏支配」は年代が不明であるが徳川初期時代のものに相違ない、歳神大明神宮以下十四社を掲げている。

三　道生館に入門

渡辺重石丸は天保七年（一八四九六）十一月十五日豊前国中津に重蔭の二男として生れ、通称を鉄次郎、豊城、鳥栖園隠士、風庵主人、鉄十字等の号がある。父を重蔭、祖父を重名と称し、代々中津吹出浜古表宮の大宮司重名は本名である。宣長の高弟で宣長の著「取戒慨言」にすぐれた序をよせている。

道生館　国学者渡辺重石丸は元治元年（1864）、それまでの塾を道生館と名づけ、中津桜町に設立した。明治元年（1868）閉鎖に至る四年間に多くの志士を輩出させた。（山本聴治氏提供）

天地の中に、八百国千国と、国はおほけど、吾皇御国ぞよろづの国おや国、本つ御国にして、あだし国々は皆、末つ国のいやし国になもありける。（中略）たとひ、ひとてなみの国ならむにも、己か国をおきて、あだし国をたふとまむは、己か国にはまめならずてよその君にへつらいつかへ、己が親をすてて、人の親をいつかむがごとし。

と述べ中葉以来、儒仏の為に皇国のみちの蔽はれたるを痛歎して神直日大直日神の光を仰ぐべしと論じ、又高山彦九郎と親交あり彦九郎重名の家を叩き胸襟を開いて快談したと伝えられる。

兄の重春も国学を学び、佐久良東雄について学び長歌をよくしたという。かやうな家に生れた重石丸は幼時より俊敏、八才の時中津藩儒者手島物齋について漢籍を学び十七才の頃野本真城の白岩塾に入った。真城は気節の士として聞え、西洋窮理説をも研究し、又好んで天下の事を論じ入塾した者にはまず藤田東湖の「常陸帯」「犯境録」等を読ませた。重石丸は非常にこれを喜びこの頃から慨然として志を立てたといわれる。

二十一歳の頃剣を学び、久留米に赴き修練せんとしたが学友元田直（肇の父）に忠告され思い止まり、専ら国学に専念するに至った。（竹下一馬著、『固本策解題』一一頁～一三頁）

安政四年二十二歳にして近隣子弟の教育に当る事になった。千座が中津に入塾したのは九歳の頃といわれる。そうすると丁度重石丸の私塾ができた三年目である。勿論、父求馬がその頃国学にいたく心をひかれ頓到していたことが渡辺塾に入らせた主なる原因であり一方又、祖母花屋の実家は深水に住んではいたが中津藩士である為、中津に親藉知己の多かった為にこの実家の世話が多かったろうと思われる。文久二年十一歳の時には祖父右近（播摩守）事善睦が歿し妹福子が生れた。その頃は時々赤尾に帰った事と思う。その翌々年元治元年千座十三歳重石丸二十九歳の時愈々家塾道生館が開かれた。重石丸は祖父重名の歿後時勢に圧せられ、国学を学び、専ら神典を講じ敬神愛国の教育が始められた。千座は進んでそれに入塾したのである。幼年期より青年期に至るこの間、重石丸に師事した事は千座の一生をこゝに決定してしまった。即ち道生館の教育はその「銘」に言いつくされている「敬神尊皇を主とするは言うまでもなく、分を明らかにし、名を正し、彼を末とし此を主とするものであり、学に志す者は先づ礼と儀とを正し、言と語とを慎しみ、念なく闘心なく、長幼序あり、実学を講究し以て外侮を禦ぐ事を心とすべき事その他、奢、酒色、非礼、放心等を戒め、心身を清潔にし、之を貫く敬神を以ってし心を学に専らにして、よく寸陰を惜しみ一言一動、義以て質となし、恭遜にして而も篤実である事」が必要だというのである。千座の日頃の学行は二十九歳の若き師の教をそのまゝ実践に移したのである。後に彼が、西南役に従軍の途次、笠松村より、赤尾村曾根の本好邸に訣別に行く時のことをきくとよく了解できるのである。　又後に千座が死を堵して結んだ学友に対する情誼もこゝに

淵源していると云っていゝのである。

この道生館時代に出来た友人が彼より三つ年長の増田増太郎、八つ年長の全郡江島村の産柳田清雄、同年の岡本真坂等である。彼等が生死を超え国家を憂え、乃公出でずんばの熱血をたぎらせ、終始行動を共にした純情はけだしこの時代に練磨されたものであらう。

道生館が中津藩尊皇思想の発展に貢献した功績は偉大であり、またこの学風は近隣の子弟をいたく感激せしめたのである。重石丸は平田篤胤に深く傾倒し大人の著『霊能真柱（たまのみはしら）』等の講義をなし憂国慨世した。神職のみなら予僧侶まで道生館の門を叩いて勤皇説をとなへたのは、いかにその学風の影響をうけたかがわかる。慶応三年重石丸三十二歳の時平田大人歿後の門人となった。

斯様にこの地方を啓蒙した道生館もこゝに閉鎖のやむなきに至った。それは明治元年冬、師が行政官の召により京都皇学所に出仕し玉松操、平田鉄胤、矢野玄道、八田知紀等と共に教育に従事する様になったからである。

道生館に起居していた頃から彼はよく家に帰り家職も勉強していた。しかし彼の一生を支配したようである。それは増田、柳田、岡本、梅谷等の知己を得たためであらう。たゞおしむらくはこの間の消息を知る資料が皆無の為、全くうかゞう事が出来ない。

四　祠官に任ず

千座は道生館時代もよく赤尾村に帰り、長子として将来家職をつぐための用意も忘れなかった。本好氏は宇佐宮神人であったので赤尾村鎮守奉仕のみならず、宇佐宮経営のための氏子支配や宇佐宮発者職として宇佐神楽の修業まで修得しなければならなかった。明治の宗教行政はすべての人民を神と仏に所属させた。明治四年制定の戸籍簿が示すようにその人民には必ず氏神壇那寺が必要であった。即ち氏神は、出雲大社の出張所であり、幽冥界に入ると悉くその氏神の支配をうけねばならないことになっていたのである。仏教に於ては相異る宗派に属するが氏神はすべての宗派を統一する。このように政事は祭事によって決定し、人民は生れては奉告し、死しては奉告する所が氏神であった。徳川初期時代の記録によると本好①氏は赤尾十四社を支配していたが、千座の家はその分家であるからそれも狭められ、祖父播摩守の時代は、赤尾村春日大明神四社の祠官をして

いる。（本好文書天保七年吉田家神道裁許状）祠官は世襲である故に千座はこれを襲かねばならない。祠官修行は実務によって勉強した。彼は道生館時代十六歳の頃には、一通り全部修得していたと云われる。同村に四つ年長の同輩がいる。園田壱岐守[2]の長子左馬介繁樹という人である。仲がよく、よく神楽「小太刀」を共に舞っていたという。特に少年千座の「小太刀」は氏子の讃嘆の的であったという。

殊に父求馬は「小太刀」の名人で如何なる人もこの人の右に出る者はなかったといわれていたが、年老いてより、神楽中左膝を三寸切り下げたのでそれを動機にぴったり止めたといわれている。

道生館の閉された明くる明治二年十八歳の時、九月十八日又もや妹福子がなくなった。これで彼は二人の妹を失った。若き千座にも人の命の無情を感ぜずには居れなかった。書、歌をよくし日記もあったと伝えられるが全然みつからぬ為いまこの時代の状態は全く知られない。

明治四年五月二十八日二十歳の時、道生館のあとをしたう門人たち主として増田宋太郎、宇佐の[3]糸永茂昌、柳田清雄等は中津に皇学校を設立したこの時も種々奔走したそうであるが、これは渡辺重石丸の援助が非常にあったといわれている。三百人の門弟が集まったが、翌五年十一月に第三十六番中学校に統一されてしまった。

その翌五年千座二十一歳、第八十三区（前記四社の）司掌を拝命した。その時、石高三十八俵を受領したので、二十の青年にはすぎると郷党は大いにうらやんだといわれる。

翌年二十二歳の時六月四日に朋友江島村の柳田清雄が四日市に中学校を建てるという。赤尾村に居た関係、柳田の為に色々と奔走して周った。ことに宇佐郡文化の中心となるものであり、世は滔々と欧米の風に流れて行く、みくにぶりの学問をこの地に広める事は、宇佐の神廟と照し如何に当時の宇佐知識人たちが苦心したかが偲ばれる。糸永茂昌、南一郎兵衛、下村三鍬、末広厳石、吉成道彦の人々がその表に現われた主な人々であった。

註　①前節註②に同じ

②園田壱岐守の長子であり権訓導となり大教院に働いた。後速見郡で死んだ。
③小野精一『大宇佐郡史論』九一六頁

五　田尻騒動の主謀

祠掌を拝命している千座も天下の形勢をながめると、赤尾村の神前で静かに祝詞を奏してはおれなかった。中津街道の往復はくりかへされたのである。先祖善勝や、将軍宮の御最後の地と伝えきいている池永坂鴻ノ巣城趾（中津市寒矢堂）に立って幾度か南朝の志士の忠貞に流涕したことであらう。その頃増田一派と共に大久保甲東を代表する薩摩の勢力こそ最もにくむべき則奸の奸臣として、これを討つことこそ、足利氏の打討にも当るものであるとして、各地を奔走、同志を集めていた。然しこれには相当の軍資金及武器を必要とするのでこれに充つる為には、敢て暴挙も辞する訳に行かないのである。彼は遂に意を決し、同志を集め増田等と謀り、中津の在にある田尻村の田尻政五郎の宅に入り軍資金を調達するの謀を立て、明治六年二十二歳の時焼討事件を起した。間もなくこれは取調べの上日田の獄に同志と共に入れられたのである。

本好千座旧邸　宇佐市長峰区赤尾字曾根小字神にある。附近に門田などあり中世土豪の屋敷を思わせる一角に一族の家が数戸あった。

か様にしている時、同志の薩摩に対する見解が変って来たそれは薩摩には文明開化の大久保一派と又西郷南州一派の尊王攘夷の思潮が強く抬頭し征韓論が世上に出る様になって来たのである。征韓論については先に国学者丸山作楽あり、今亦南州がここに現われたのである。

これを知った増田は討薩計画の誤れる事を知り敵は文明開化派にある事を知ったので、増田は在京中、摂津国住吉神社の少宮司に任ぜられていたが、

任に卦く暇もなく、同志梅谷安良等に討薩計画の中止の旨を述べた。この計画は相当大規模に計画されていた為に当局もそれを探知した。そこで早速自ら進んで責を負うべしとして同志と共に久留米に自首した。これは明治六年五月のことである。久留米では寛大な処置をうけ七ケ月の拘留で終った。千座の田尻騒動はそれ以前にあったものの如く、当時世の人は、千座等の計画の内容を知らない為に相当非難し、中津では随分と喧伝されたという。

この時、世は征韓、非征韓の論が沸とうし八月十七日、閣議に於ては西郷が遣韓大使に任ぜられたが、九月洋行中の岩倉具視、大久保、木戸、伊藤等の文明開化派の帰朝により猛烈な反対にあい、十二月廿四日征韓派は敗北し、西郷、江藤、副島、板垣、後藤等は遂に野に降った。

この前本好千座は日田を出され、中津に帰り、そこから 赤尾村の父本好求馬に手紙①を出している。

「本好播摩様（ウハ書）　於中津より一学」

以書中申上候、然ば私儀日田表より（以下焼けて読めず）御免　相成「　」御気仕上下「　」奉「　」比臨母様にも御伝願（以下闕）

とある。丁度日田より許され中津に帰り先づ、父母に安堵をさせるために出した手紙であらう。

①本書は本好播摩旧宅、二階の古襖のはり紙の中より発見された。

六、共憂社の設立

明治六年の暮旧中津藩の同志は皆出獄して中津に集り益々所信を固めた。翌七年正月十四日右大臣岩倉具視は旧土佐藩士に襲撃されている。その頃佐賀島義男より増田の下に檄文が届けられた。中津では岡部伊三郎以下四人を佐賀に内偵の為に派遣している。三月一日、佐賀征韓党の首領前参議江藤新平、佐賀憂国党の首領、前秋田懸令島義男等は遂に兵を挙げた。

二月二十日、増田等二百人は佐賀に向ったが時機を失し、佐賀勢は敗れ、一行を梅谷安良に引率帰郷させたが、この時増田は単身、長崎に行ったようになっているがその時本好千座を同行しているのである。これは本好家にその時買って来た土産として最近まで保存されたものがあったので分る。何処まで同行したかは不明であるが長崎に同行したことは間違ない。

増田は島原の丸山作楽門下の小郷吉衛門を訪ね、更に遠く薩摩鹿児島に周り桐野利秋にも面接した。この年五月台湾征討の議が起った。それは明治四年十一月の琉球島民六十名の惨殺事件及び備中小田県の四名の遭難事件が原因である。明治七年四月四日陸軍中将西郷従道は台湾事務都督となり、兵三千六百人を以て征台の途についた。

増田は六月再び鹿児島に遊び桐野利秋に会う。この時南州翁の意嚮を知り間もなく帰郷し、すぐ同志は集り共憂社を設立した。土佐の板垣退助は立志社を代表し、林育造を中津に派遣しその前途を祝ってくれた。そこで八月本好千座は共憂社を代表し、四国方面主として土佐に派遣せられた。この頃共憂社は西郷よりむしろ土佐派板垣退助の方に心を寄せていたと云われるので、この本好の派遣は相当に重要な意味を持っていると思うが、書簡、日記、何物も残さぬ為全く不明である。この時千座は二十三歳である。

八年九月には増田の実弟岡本真坂を豊後に、柳田清雄は長州に派せられ前原一誠を訪わせ、ひそかに天下の形勢を考えたのである。

その時増田は林との会談によりその憂国の熱情にうたれ、忽ち熱烈な民権論者となり、中津に於ける自由党の首領として土佐の志士と相通じて国事に走せんとした。そのため同志と共に明治八年十一月十三日、田舎新聞が出された。その思想は全く土佐派的であったといわれる。

このように殆んど家職を省みる暇もなく、殆んど中津ばかりで生活している本好は遂に意を快し明治八年六月九日祠掌を辞任してしまった。同人戸籍簿には

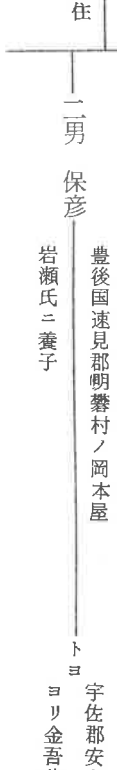
明治八年六月九日依願被免

とある。

全年十一月十三日、中津共憂社の同人で田舎新聞第一号が発刊せられた。これは主として共憂社の人々が、土佐立志社、板垣退助の民権論に多大の影響をうけ、その感激から田舎新聞が創刊されたもので、西郷との何等かの黙約の下になされたであらうといわれていたが、それは皮相の見解であり、中津と関係のある西道仙の長崎自由新聞も鹿児島とは何等内面的脉絡があったとは考えられぬといわれる。

翌明治九年の二十五才春頃千座は木村ムツ子と結婚した。ムツ子の父は中津藩の小姓役を勤め、当時下毛郡大貞村に住んでいた。ムツ子は木村某の二女であった。これには祖母の実家の関係が深かったが共憂社同人の肝入があったらしいが明らかではない。しかし世話は同族、本家に当る本好善勝（越後守）が媒酌をしたと云う。ムツ子は翌十年四月、最後の千座との訣別の時、既に妊娠中であったが、到底生きては帰れぬから、里方に帰ってくれという千座の言葉で実家に帰り、男子を生んだ。三十三日目母いとはムツの家を訪ね孫の長男に会いに行ったが三十三日目、子供は死んだという。死後周囲のすゝめによりムツ子は玖珠郡某邑大庄屋某家に嫁いだと云うが、その後は本好家との交りもいつか絶えてしまっている。

左に千座夫人ムツ女の生家木村家の略系を示すと



千座二十五才ノ時結婚明治十年離婚長男ヲ生メドモ三十三日ニテ死ス
依ツテ玖珠郡ニ嫁ス
二女ムツ

千座は二十一歳のとき結婚し、二十二才で死んだというように子孫に伝わっているが、記録及戸籍によると嘉永五年の生れであるから「二十六才にして死す」というのが事実である。

註 (1)香春建一著『西南役、中津隊先陣ほぎ奮戦史』一八頁

七　西南役中津隊に投ず

新政府に対する憤懣は遂に佐賀の乱となり明治九年十一月には長州萩に前原一誠が破られ、その前十月廿四日には熊本神風連の挙兵、主将大田黒伴雄による宣戦は壮厳なものであった。次いで筑前秋月党の挙兵は十月二十六日であった。古処山の麓をすぎ豊前国豊津を経小倉城を落し前原と合流する計画は完全に失敗に帰してしまった。この秋月党の豊前豊津の戦の失敗は、計画が大規模であっただけ、中津共憂社の面々にとっては大きな衝激をうけたのである。この三挙兵はその間に一連の連絡があった筈であるが結果は分裂挙兵の形になり、ひとしく鎮定せられてしまったのである。従って岩倉具視、大久保利通等の非征韓派の政府は自ら鹿児島に対して過敏な神経を使った。その結果、大久保は九年末より十年一月にかけて中原尚雄以下廿数名の刺客の派遣にまでおよんでしまったのである。

西郷以下その幹部を悉く葬り去らんとした大久保等のこの計画は却って私学校生徒の強固な団結と烈しい憤激を買い、私学校密偵谷口登太の探知する所となり政府の陰謀は悉く暴露してしまった。鹿児島の激昂はもとよりである。政府は更にそれを恐れ、草牟田、新盛院に保管の武器弾薬まで夜中赤龍丸によって大阪に運搬させようとした。こゝに至って政府側と私学校生徒との衝突が起ってしまったのである。明治十年一月廿九日の夜のことである。これ即ち「西南戦争」の発端となったのである。

この頃共憂社の増田は第三回目の訪薩を行った。明治十年一月中旬から下旬にかけて凡そ十日余りの間であったろうと云われている。一月廿九日の早暁、西南役勃発の直前増田は鹿児島を出発し二月四日夜、豊前国宇佐郡まで帰りつきその夜豊前長洲村の嘉満屋で梅谷安良などを集め小宴を催した。勿論赤尾村（長峰）より本好千座もはせ参じて色々と鹿児島の状況をきいたが増田はこの時まではっきりと西郷というものを頭に映ずる事が出来なかったのが三回目の訪薩によってはっきりなって来た[1]のである。むしろこゝまでは、増田の西郷に対する認識は不完全なものであるとみるのが至当と思わ[2]れる。それは丁度前の討薩の企てといゝ、或いは又立志社板垣に対する自由民権へのあこがれといゝそれが当然の見方であらう。

従ってこの時の会合は始めて認識された西郷観にもとづいた意見の発表で、中津に帰るのを待ちきれなかったのである。中津に帰るや、二月中旬改めて共憂社同人の会を催した。恐らくこれは二月十八、九日であったらうと思われる。本好が最後に赤尾を立ったのは二月十八日である。妻「むつ子」は既に妊娠中である。しかし西南役の勃発を知り又、増田の長洲村の会談などで、西郷の愛国の至情に感激を覚えた。彼は先には討薩のために田尻騒動まで起し、日田表につながれたこともあるが、こんどは西南役参加を決意していたのであらう。その時、暗に母「いと」も父求馬にも知らせず、ただ妻むつのみに、内心を打ちあけている。

「どうせ自分の命はかねがね大君に捧げた生命で、先に田尻騒動で既にないのが今まで生きのびたのである。既に西南役は起った。どうしてもこれに参加せねばならぬ。お前と共に生活したのもほんの一年、その間も共に居た事は少ない。しかし御国の為大君の為には一身を賭して尽すのが男子の道である。姙娠中ではあるが今日より己の命はないと考えてくれ。そしてできれば里に帰り、子どもは、どうか立派に育てゝくれよ。」

とひそかに水盃を交した。妻むつも武士の娘である。主君の為に男子が死ぬは当然なりと常々教えられている。少しもとりみだすことなく、にこやかに「立派な御働らきを御待ち申して居ます。子供のことは必らず立派に御育て致します。」と別れをつげたというのである（永弘スマ談）。

共憂社同人の会以来彼は一度も赤尾には帰っていない。同志と共に奔走していたものと思える。その三月田原坂の激戦は展開された。田原坂は仲々にぬけない。まちきれなくなった中津の同志数十人は党薩の議を起した。三月十五日である。しかしそれも既に二十日には田原坂は破れてしまった。党薩は今ぞと許り各地に起った。熊本三隊、人吉隊、延岡隊、飫肥隊、高鍋隊、福島隊、等々ぞくぞく熊本へ熊本へと向った。

この間にあって最も強く共憂社を動かしたものは三月二十七日の福岡党の挙兵であった。増田がかねて発してあった密使某が挙兵を伝えたのは卅一日である増田は直ちに檄を四方に伝えて卅一日夜中津の海岸闇無浜なる山田元七（竹下著増田伝一八七頁には元八とある）方に参集した。同志五十九名、増田を隊長、梅谷を副隊長とした。武器兵器等の処置を整えその夜十二時、後藤純平の宿所たる桜町松野屋に集合の上砲声一発を合図に旧城内の支庁を襲い大分に向う事となった。中津隊の連判状に記名の名は凡そ六百人を越えていたらうといわれるが檄の急であったのと、薩軍の不利の為に志を変えたものが多く、最後まで生死を共にすべくその夜中津隊の挙兵に集ったものは僅かに五十八名であった。内四十七名のうち旧中津藩士五名、中津町平民一名、旧熊本藩士一名、旧千来藩士一名、旧森藩士一名、大分郡平民一名、増田従僕、宇佐郡人は本好千座唯一人である。

宇佐郡平民　本好千座　二十五歳（『中津隊先陣ほぎ奮戦史』　四五頁）

とあるのが千座である。当時千座は祠官を退き平民となっていたことが分る。最長年は四十才で二人、最年少は十八歳で二人、後は大部分二十～三十歳の者のみである。名簿には二十五歳とあるが実は嘉永五年の生れで二十六歳の筈である。

卅一日夜十二時増田以下五十九名は思い思いの武装をして松野屋に集った。直ちに中津、西方は広津、南方は島田、宮永、東方は蠣瀬、錆矢堂の要路を扼した。千座は恐らく錆矢堂に進んで行ったのではないかと思う。それは幼少の頃より、西征宮並に、先祖善勝最後の地ときいている魂魄留る地である。幾度かその傍を通るたびごとに沖代の平野をのぞみながら思いを南朝の御代にはせていたといわれ忘れられぬ地である。その時掲げた告示がある。中津隊の性格はこれを見なければ分らぬ。

今般義挙の儀は我等多年抱慼の宿志にして別に檄文も有之候へども、多忙中　御報知に難及候。然るに昨今各地に差出置候探偵者帰朝、本月廿六日佐賀の士族事を挙げ、同廿七日福岡之を継ぎ、米柳も亦将に発せんとす。吾輩独り時機に後るれば人民の義務、何を以てか立たむ。故に事頗る軽挙に亘ると雖も今夜激発に及べり。此段豫め御承知可申の処嫌疑を恐れ切迫に立到候儀は萬謝の至りに候、諸君我等憂国の微衷を憐察あらば老者は少者を鼓舞し、少者徒は事を同じうし、協力戮力、共に御扶助あらんことを、若し今回御着手相成難く候はゞ緩々御援挙御依頼申候也

明治十年三月卅一日

中津諸有志御中

同時に二豊人民に与えた告示がある。

方今官軍の徒、上は天子の宸襟を悩まし、下は人民の苦情を顧みず、私意を逞うし、収斂を極め残忍苦刻至らざる処なし。我輩憤慨に堪えず之を掃除せんとす。各県とも同論に出で、本月廿六日佐賀、同廿七日福岡、同卅日秋月共に義兵を挙げ賊吏を誅し、上は天子の叡慮を安んじ下は人民の艱苦を救はんと欲す。諺にいう、上のなす所下これに習うと。区戸長等、亦官威を借って人民を苦しめ、無用の民費を増し私慾を謀る等、不埒の所業少からず。依って人は即ち捕縛し、吟味の処分に及ぶべく、尤も其罪明白なるものは直ちに召捕え差出して苦しからず候

月　　日

新政党軍議所

両豊人民御中

このようにみると、この義挙は単なる軽挙妄動の類ではないことが分る。このようにみると結社共憂社の思想も大凡想像がつくのである。「天子の宸襟を悩まし、人民の苦情・・・収欲」には高知派の自由民権の主張が見られ、「官威を借りて云々」等には幕府政治の延長打破しようとした意図がよく見られる。

とまれ、中津隊には人員点検、進発の命が下った。突如として放たれた砲声は中津町民の夢を破った。四月一日午前一時過である。支庁長馬淵清純、支庁十等出仕堀兼元修等を血祭りにあげ中津城内大分県支庁は難なく占領し、四方の銃声がやむとまもなく城外の諸隊も大手門前に引上参集した。この時はるかに監獄の火が夜空に燃え上っていた。こゝに江島村（宇佐市柳ケ区）の産柳田清雄の手になる檄文が音吐朗々（四月一日午前四時）朝の空気を破った。

方今、我が神州の大勢を熟視すれば東に魯国あり西に英国あり、みな蚕食鯨呑せんとし、加之討台の役より怨を清国に結び、四方皆讐敵にして、国勢の危きことまさに累卵よりも甚だし。此の時に際し宜しく勢を張って、内情を鎮すべきに却って政府二三の大吏天皇陛下の聖明を壅蔽し、叡旨を矯め、海内を苛酷し外夷に阿順し、尚且偷安、国権を失墜し私意放縦、民権を剝奪し、内怨を積み、外侮を甘んじ卑屈極りなく、慕政至らざるなし、これ継ぐに金貨濫出、国債繁殖、我が二千五百三十年来の独立帝国をして終に外夷の制御を受けしめんとす。其れ是を何をかいはんや、曩日前参議江藤、前原の如き、国基民権の不立を憂慮し、挽回を謀る者を目するに国賊を以てし、毫も大義名文を問はず之を斬戮誅滅し、今又国家の棟梁中興の元老たる陸軍大将正三位西郷隆盛公を始め、少将篠原、桐野の忠臣を刺客の刃に殪さんとするに至る。大逆無道天地も共に容れず神人同じく憤るところ実に国家の讐敵、人民の残賊にして抑々亦天子の賊臣なり。之を倒し之を廃し以て内は一国の元気を振起し、外は外交条約の規律を確定し従来の安全を全くするは、臣子の職分国民の義務、画さざるべからず。今聞く西郷公閣下に至らんとす。而して賊吏私人前路を妨ると。我輩亦、神州の一民、憂国の哀情傍観座視するに忍びず、投袂蹶起し賊を南豊に討し、忠臣の進路を開かんと欲す。凡そ我が同志国民の義務、臣子の分を画さんと欲せば速に馳せ会し、共に俱に賊兵を鏖にし、征旗を東し、元悪の首級を断じ、速かに　字清澄の功を奉し上は以て歴世皇恩の万一に報答し、下は人民天賊の権利を回復し、国威を海外万国に拡張し、独立帝国の面目を改新せんことを企望す。唯其れ正邪の分るゝところ、賞罰の係るところに至りては、天鑑　上にあり、それ誰か之を誣ひん

明治十年四月

新政党別軍

とある。これを以てみると同志の心中、その思想及共憂社の生立がよく分る。その目ざす所は幕府なき後の新政府要人の討伐であり民権の確立であり、一君万民の肇国理念の復活にあつた事が分る。

かくて大手門前を東に出発したのは四月一日午前四時過ぎである。柳田清雄、橋本重年の二人は盲目の故に之を見送る。この日赤尾村では本好千座を脱籍している。

一隊が笠松村（宇佐市長峰区）にさしかゝるや千座は最後の訣別に単身隊よりはなれ赤尾村曾根神の本好邸に立寄った。別に中風の為隠居して別家していた父求馬にはいんぎんなあいさつをし、母には何にも知らぬ態にて「千座も、もしかすると西南戦争に出らねばならぬので、すまぬが大貞の木村に行っていゝ刀を一振貰って来てくれまいか」という。「そうか、そりゃ結構だ」と母は簡単な身支度をする。千座は妻むつには暗に「出戦」「死」をほのめかした「早いがよかろう」と母が表より出る。「では私も今日はすぐ中津に帰らねばならぬから」と云って裏から出る。この背中合せが最後の別れであったという（永弘スマ談）。

喜びいさんで母は大貞まで歩いて、その事を伝えた。木村氏は「そりゃ結構、どんないゝのでも持って行くがいゝ、六十振程あるから千座が直接見に来るがいゝ」という。母いとも「それはそうだ」というのでその足で帰ったが、帰ってみて千座が心配をかけまいという親思いから、それを秘して最後の別れに一寸立寄った事が分ったのである。

千座は単なる武人ではなかった。檄に云う「之を到し之を廃するは・・・・」は「臣子の職分」と「国民の義務」天子の為、国家の前には何物もない。しかし親を思う子の心、子を思う人の心は千座にもあった。心配させまいと何事も己が死す事によって国家は強国になる。万人の幸福の為に一身をすてる。千座の心情がはるかに偲ばれるのである。

一日の午前八時頃四日市に着き宇佐では道生館門人の並松一枝と石山真春雄が入ったこれで宇佐郡人が計三名となった。皆

祠官である。勿論千座とは、道生館来の友人達である同志の喜びは想像にかたくない。

豊後高田に至ると筑摩宋太郎が同志十二名を率いて一行に加わる。立石、中山香をすぎる頃は日はとっぷりくれ、一行は各二個の松明を照して山路を急いだがはるかに之をみた巡査隊は戦わずして意気既にくぢけ退いた。豊岡に近い頭成についたのは二日の午前二時頃、そこで二隊に分れ、一隊は後藤純平・梅谷安良を長として日出より海路大分に向わせた。増田は一隊を率い別府本道に向い巡査隊数十名を破り更に高崎山麓仏崎海岸に至りこゝより海路の一隊と合し大分城を目指して進んだ。二日の正午であった。

大分城内の県庁に於ては県令香川真一以下守兵百五十、旧城外廓によって防戦したので中津隊も力斗したが募兵の為抜くことが出来ず、間もなく大分城攻撃は断念され一刻も早く陸軍本隊に合流すべくその夜は別府南浜腕に泊った。

その時矢田宏以下六名の同志が参加した。矢田は別府石垣の人で先に御許山義挙の時も参加し、その後豊川小学校で教鞭をとっていたがそれをなげうち、投じたものである。

三日の払暁別府を立ち、石垣原南境より鶴見山の東麓に出で由布嶽の南麓岳本を経て湯の平に至り、飯田高原を西にとり、四日の未明、熊本県阿蘇郡北小国村に着いた。

山間の春はいまだ浅く、寒さと餓とにたゝかいつゝ五日早朝内牧に出で、こゝで始めて薩軍先発隊に接することが出来た。実に中津を立ってより六日目である。

増田、梅谷は大津に、同方面司令野村忍介に会い、翌六日熊本に至り二本木鳥居某の家にて西郷に面謁した。西郷は喜んで酒食の饗応をし、間もなく中津隊は大津に滞陣する事になった。この時中津隊は増田以下七十五名であったという。

大津方面の司令野村忍介の摩下に入りこれより中津隊と称した。「先陣ほぎ」というのは中津隊の別称である。中津隊は一ケ小隊を編成、小隊長増田宋太郎、分隊長梅谷安良、半隊長桜井貫一、後藤純平、周旋方梅谷藤次郎、隊外周旋方矢田宏、嚮導森伝次郎、押位岡本真坂以下五名、伍長久保益良以下三名給養掛筑摩宋太郎以下四名という役割になった。

この頃本好家では既に死亡せると思ったのであらう四月十日には死亡届を出し戸籍を改めている。さすがに両親始め本好一族は悲想な思いにあけくれしていたのであらう。

これより先三月三日、吉次越六本楠に於て篠原国幹を失った薩軍は、更に四月十二日御船の戦に於て三番隊長永山弼三郎を失った。翌十三日、西郷は熊本二本木鳥居某方を出で東方三里なる木山に移った。十四日山川中佐の一隊は宇土より熊本城内に突入して遂に薩軍の包囲は破れた。

四月十六日佐久間中佐は歩兵十二個中隊に砲兵一ヶ分隊を附して大挙して大津に殺到した。中津隊は大津東方二重峠方面より不意に敵の左翼に殺到して之を撃破して佐久間中佐以下六十余名の死傷者を官軍に出させた。

中津隊が薩軍合流後始めての戦斗であり、初陣の中津隊が斯様な戦果をあげたことは、中津隊の意気、おして知るべきである。

四月二十日、建軍一帯の大激戦が転回され、熊本城東北は大津より木山、建軍御船を経て南は堅志田に到る戦原十餘里、官軍三万、薩軍八千である。大津建軍で大勝を博したが御船方面の惨敗に如何とも出来ず、薩軍は全線に亘って敗退のやむなきに至った。しかしこの戦斗に於ても中津隊の勇戦奮斗は目覚ましいものがあった。

二十日所謂矢部会議が行われた。本山より浜町に退いた桐野利秋は十四日以来この地に宿陣中の西郷に謁し村田新八、池上四郎等と会し、戦略を議したのである。結果日向の西部山間より迂回して、肥後人吉に出でその地を根城に漸次日向、薩摩、大隅方面に軍勢を配り、除々に兵員並に弾薬糧食の補給をはかり、捲土重来の機を待つことになった。

二十一日勇名をはせた中津隊は白糸村大字犬飼に陣する事三日、その間西郷は二千余の兵を率いて浜町を発し、山岳重畳の間を東行すること五里阿蘇郡小峰村野尻に達し、翌二十三日、更に東南方黒崎附近の国境を越えて日向に入り鞍岡に達した。この日、桐野は残軍二千餘を従えて浜町を発し、大西郷の後を追い馬見原に達した。西郷は鞍岡村より霧立越を経、言語に絶する難路を踏破して二十七日漸く人吉に達した。

翌二十八日肥後国球摩郡江代会議で豊後進撃を命じられた奇兵隊長野村忍介は二十九日、兵二千二百を率いて江代を発し国境を越えて日向椎葉を越え神門、富高を経て五月八日延岡に達した。更に十二日豊後国重岡村に入り警察分署を襲撃した。

日向の西北隅三田井はいわゆる高千穂境であり、五ケ瀬上流に於ける唯一の都邑として、西南は馬見原に、北は豊後竹田に近く、東は延岡に通ずる要衝である。

桐野はこの地を重視して、松岡精介、小浜半之丞に三百餘人を附してその軍備を命じたが更に延岡隊長、大島景保中津隊長増田をして各々その隊を率いて増援せしめた中津隊の勇戦奮斗はめざましいものがあった。

五月五日中津隊は三ケ所村坂本の戦斗に負傷者五名を出した五月十四日には三ケ所村鏡山戦斗に従事し廿四日の三ケ所村男坂戦争には遂に敗退のやむなきに至った。

次いで六月一日西臼杵郡岩井村大楠に達し畳を築きこれに拠ることになったがその前日五月三十一日筑摩宋太郎の手帖にあった中津以来二ケ月目の中津隊[3]人名録をみると増田以下八十二名である。隊本部一、二、三、四分隊と夫々五隊に分れ、千座は第一分隊の六人目に出ている。

この時中津隊は奇兵十六番、廿一番両中隊と共に大楠に二十日の間在陣した。同志は久し振りに陣中閑日月を得たのである。増田のこの時の歌がある。

後れしと人なとかめそおくれても
一たびはちる山桜花

同志は手をうって唱和したという。

このあたり一帯は、天孫降臨に因む尊貴な伝説にとみ、家々の頂には千木を置く農村聚落風景で、思わず神代の様を想像させるところである。中津隊の勇士等が、この間の無聊をなぐさめる為、折にふれては口吟んだという歌がある。

雨の降る日と
日の暮れがたは
生れ故郷が
思われる

人はひまになると、いろいろのことが思われる。わけて家からはなれると、故郷の山川、風土、家族のことまでが次ぎ次ぎと偲ばれる。昔も今も人の心に変りはない。

大楠在陣二旬延岡本陣の野村より召命があったのは六月十九日である。勇士は喜んだ。奇兵二ケ中隊と佐土原隊とにあとの守備を依頼して二十日午前六時中津隊は大楠を発し延岡に向った。折柄沛然として大雨が来た。一行の踏みしめる足には非常な力がこめられた。同日夕刻延岡に着いた。増田は北町の河内屋、隊士は北町三福寺前の甲斐太七方に宿営した。

二十一日野村は延岡南町後藤庄作方の本営で軍議をひらいた。結果は日豊国境にある赤松峠、黒土峠、宗太郎峠、陸地峠の要を敵に先じて奪いとり之を占拠するという事に一決した。

六月廿二日増田は梅谷と共に野村の下に訪ね、豊後進撃は中津隊郷里への進撃であるから、なれば先にして欲しいと依頼した。野村は承諾した。同日野村と共に中津隊は延岡を発し熊田に達した。廿三日熊田を出発、本営では軍議があり、夜間進撃した。奇兵隊長野村は全軍に命じ北行せしめ本営を日豊国境に近い鐙に置いた。

翌六月二十四日、これが千座最後の日である。今日までその遺族も誰も知らない。二月十八月を立日にお祭りされている本好千座の最後の日である。

早暁より中津隊を先鋒に西南戦争史上またとなき決戦が赤松谷一帯の地にくりひろげられた。夜の明けを待ち朝霧の中から喊声をあげ、突如敵は六畳に迫り一挙に重岡をほうるために、たちどころに六畳を奪い取り、敵の逃げるのを追いちらして大勝利を博したが、他の方面の戦況は思わしくなく、やむなく軍をひくことになった。

この日の激戦に、中津隊には山田丑太郎、大原一二三、百富半三郎、野沢尚二、岡本真坂、村松義直、高石虎市、山田陶太、山口林三の九名の負傷者及び、本好千座、中村勝太郎、津村吉次郎、林田菊治の四名が戦死した。

本好千座数え年二十有六才憂国の義憤に起ち、或は板垣に面接し、四国の志士の連絡に、或は討薩の為に田尻騒動をひき起したり、日田の獄舎に呻吟したり、家業もなげうち、皇国復古のために殉じたのである。中途変節する者の多い旧中津藩の中にたゞ二人の宇佐人として柳田と共に終始増田と生死をちかい、柳田が帷幄に策をめぐらせば、千座は事を実行に移して来た。増田の心の友千座もこゝ赤松谷切込の露と消えたのである。

本好千座の墓　本好氏は珍しく南北朝以来の墓地が保存されてきている。この墓地は三回目の墓地で寛永以来の本好氏の墓が50基許りある。

増田の感概亦深かったらう。「本好なぞが乗っているから、心してこいでくれ」度々と増田は気を使い且は本好を励ましたが、翌二十五日北川を川口に下り東海港をまたずして千座は死んだ。これをもってすると途中まではまだ生きていたのであろう。

この時同志の間には熊田進発の前にすでに次の様な申し合せがあった。

一同志の屍体を収め退くこと。

一負傷者を扶くること。

一一歩たりとも退くものあらば銃殺すること。但し銃殺する弾丸があらば敵を討つべし。

とある。こうしてみると屍体は皆適宜に収容して行ったのであらうか。その時二十五日に同志十三名の死傷者を擁して川舟で

下り、東海港では二日休養したというが、その時簡単な野辺の送りをしたものであらうか。

後に千座の父求馬はせめて千座の死場所なりともというのでわざわざ日豊の間をさまよいあるき且は訪ね廻ったが分らず、ある（地名不詳）寺で、中津隊有志の追吊会があった。その時十六名でその中に本好千座というのがあったと伝えられたが、それ以上は分らず、屍はどこに葬ったかそれすら分らずに（未だそのまゝであるが）求馬は寺に手厚い礼をして帰ったという。

註(1) 香春氏著、『先陣ほぎ』　一八頁

(2) 川上水舟著『秋月党』一六頁

(3) 「中津隊人名録発見さる」（宇佐史談一七ノ二）二二頁

八　「先陣ほぎ」その後

六月二十八日には宗太郎越と大原越の中間銭笛峠を守備する。七月十日頃豊後佐伯方面より来る官軍に対する為中津隊は北上したが弾丸の補給の為歌糸に退く。十五日夜陰敵畳を破った。二十七日に至り水ケ谷の北方板戸山が谷干城少将によって占領され八月二日歌糸又敗れ三日中津隊は古江に退く。この時薩軍の敗色愈明となった。

八月七、八日頃中津隊は延岡に入った。十四日には延岡は官軍に奪われた。十五日和田越一帯の要嶮により奪回せんとして激戦、中津隊は和田越の北端長尾山にて戦った。西郷自ら観戦した。薩軍、兵力三千五百、官軍は西郷を擁して可愛嶽東麓俵野に拠った。

翌十六日は西郷自ら筆をとり全軍に解散命令を出す。この時熊本隊六百名、竹田隊その他一千名降ったという。

翌十七日可愛嶽突破を決意し残軍六百俵野を後にする。中津隊は前軍先鋒として突進した。

十八日払暁可愛嶽頂上に達した先鋒は合図の英式喇叭の一声と共に攻撃を開始し、重岡を突破した。十九日五ケ瀬川上流の岩戸村に入り三田井に進入した。そして二十一日夜西郷は鹿児島突入を通報した。八月二十四日小麦越附近にて戦斗開始、

その夜薩軍米良に入った。

二十七日板谷峠を越え西諸県郡須木村に入る二十八日小妻木越を過ぎ小林に突入した。

二十九日大隅姶良郡吉松村に入り三十日横川を経て牧園に達し三十一日蒲生町に入った。

九月一日辺見十郎太を先鋒に午前十一時頃鹿児島に入った。

五百余の突破軍が十五日間の行程に戦死或は負傷し最後城山に突入したのは三百七十余名にすぎない。中津隊また増田、梅谷兄弟、岡本等十名内外であった。九州各地より来り投じた十三隊の中隊長自ら城山に入ったのは増田の外は佐土原隊長島津啓次郎あるのみであった。

九月三日薩将貴島清は桐野を訪い、官軍の備未だ整わぬ時米倉を襲撃せんことをこい、翌四日払暁、貴島に従い中津隊全員玉砕した

時に増田は二十九才、九月二十四日の城山陥落を待たず米倉の地に戦死、四月一日中津出発より九月四日まさに百五十七日で「中津隊先陣はぎ」も姿を消したのである。

その間の戦死傷死又は病死者については明治四十年文部省内史談会発行の『戦亡殉難志士人名録』によると増田以下三十六名が掲げられ本好千座はその七番にかゝれている。尚後藤純平[1]は「十年九月二十五日に鹿児島で捕われ十月二十二日叛逆罪により大分県に於て斬に処す」と別条にあげられている。

(1) 立川輝信「志士後藤純平小伝」（大分県地方史創刊号）に詳しい。氏の研究によると長崎で処せられたとある。

九　遺芳その他

千座は酒を好み、飲める時は三升も飲んだと伝えられる。しかしどんなに飲んでも一度筆を握ると、忽ちにして眼は落ちつき、別人の如くなったという。今残る書翰の断簡は、二十三才の時の書であるが、二十の青年の書とは思われぬ程見事な筆蹟

である。蔵書をはじめ、手翰、日誌、短冊、綴、色紙、歌集、著書など多数あったというが、十子は早く死し、相続した弟も若くして死に、姪に当る一女があったが他家に嫁し、その邸宅も、売却され二度まで競売に付せられる悲運に逢い、遂に何物をも残さぬ結果になってしまった。

たゞ姪女よしが、蔵している唯一の手沢本は『訂正古訓古事記』中下二冊のみである。その書の奥には

寛政十一年己未五月十日御免
享和三年発亥十月発行
勢洲松坂　山口兵助
皇都書林　永田調兵衛
菱屋亦兵衛

とある。本居宣長の養子本居太平が読校、彫合した千座の手沢本「訂正古訓古事記」上中下三冊が残っている。「上巻」は、一族本好兵庫が中津の塾に通っていた頃盗まれたという。今一つは『開化文章』が残っている。序文の奥書には

明治六年一月上院

とあるこその他は何物も残っていない。たゞ当時友人などが訪ねてきては「かたみ」にというので持ち帰った色紙等があるので或はどこかに、ありはしないかと思われる。そのため千座の思想、私生活、交友関係の状態等は全く知るすべがない。いとも残念なことである。

附(1)本好氏略系

田辺宿禰（朝臣トモ称ス）本好氏系図

五世孫　裔　　裔

∴神魂命――天日鷲命――田辺宿禰――善勝

姓ハ田辺左衛門尉、掃部頭

大和国田辺荘ニ代々住ス、西征宮懐良親王ニ従ヒテ九州ニ下向、後豊前国下毛郡池永坂ノ戦ニ宮ニ供奉シ打死　享寿八十八歳

善政

左衛門大夫・任曾根宮社司

父善勝ノ遺骨ヲ宇佐郡赤尾邑ニ葬リ、赤尾村ニ居住

善永――善持――善輝

政女

善宣――善房――善治

- 善元
  - 善宗
    - 善重　掃部頭
      - 善清
        - 善和　衛門（太夫）頭
- 善応　掃部頭
  - 善直　文化十三　寛政七年六月二日吉田神道裁許越後守
    - 善膳　始渡辺志摩守後本好越後守
      - 善明　リツ
        - 喜平
    - 善次　石見守　天保六年二月廿六日吉田神道裁許大元神道次第拝授
      - 善勝　越後守　元治元年五月廿一日吉田家ヨリ神道の裁許赤尾村歳神、妙見、祇園社、大根川村貴船社、笠松村北社、五社の祠官
        - 善丸
      - 善蔵
      - 勝蔵
        - 勝次郎

- 萬蔵
  - 敬太郎
    - 治吉　養子、同村赤尾舟越原田氏
- 養子 儀八
  - 妻　長女かね　下毛郡下塁形村原井井上斎米長男
  - トラ　同邑樋口氏妻
  - ワキ　遣水喜平ヲ養子ニ迎ヘ善明ヲ継グ
  - 半吾　分家ス
  - 政市
  - スマ　宇佐町永弘幸夫ニ嫁ス
- 庄助
- 女　敷田村庄屋樋田氏ニ嫁ス
- 芳助　同邑平姓園田彦右ヱ門養子

宗清

善行

善満　衛門太夫

善機　左衛門

善方

良心

善久　相摸守　享和元・五・三歿

善時　民部

善睦　播磨守、右近、妻花屋　文久二・歿

善睦　播磨守、幼名千座、通称求馬、妻いと　天保七年二月廿七日吉田家ヨリ神道裁許　赤尾春日・貴船・深水八幡・木部貴船・社祠官

千座　善隆、幼名一角又は一学

武十郎　相続　道生館渡辺重石丸門人西南役中津隊ニテ戦死

よし　養子　耕作　園田大蔵二男

よし　長峰村赤尾、園田文三妻

武十郎

福　明治四・死

附(2)　本好千座年表

西歴	年号	年令	事項
一八五二	嘉永五	一歳	七月二十一日豊前国宇佐郡赤尾村に生る。父播摩守善睦（求馬事）（三十一歳）母いと（二十歳）。
一八五四	四	三歳	妹菊生る。
			重石丸二十二才にて塾をひらく。
			五月十一日妹菊歿。
一八五七	安政四	六歳	妹よし誕生。
			三月廿六日祖母花屋歿。
一八六〇	萬延元	九歳	中津渡辺重石丸の塾（後の道生館）に入塾。
			十一月廿六日弟武十郎生る。
一八六一	文久二	一一歳	祖父右近事播麻守善睦歿。
			妹福生る。
一八六四	元治元	一三歳	重石丸道生館を興す（二十九歳）。
一八六七	慶応三	一六歳	祠官の職全部を修得（重石丸、京都なる平田鉄胤に書をよせ、後門人となる）
一八六八	明治元	一七歳	重石丸京都皇学所に入るために道生館閉鎖。
一八六九	明治二	一八歳	九月十八日妹本好福子歿
一八七一	明治四	二〇歳	五月廿八日中津に増田、糸永、柳田等と共に皇学校設立
一八七二	明治五	二一歳	第八十三区祠掌拝命、三十八俵高受領。

一八七三	明治六	二二歳	四月四日市に柳田中学校設立に盡力す。五月討幕計畫、軍資金徴発の為田尻政五郎宅を焼き日田に投獄、増田と共に千座久留米に投獄さる。その後許され中津に帰り父に手紙を出す。
一八七四	明治七	二三歳	三月増田宋太郎等と共に佐賀に江藤新平の乱に江藤の応援に行けど時機を失せし為、増田と共に長崎を廻り中津に帰る。この時増田は島原小郷吉衛門を訪ね、鹿児島に趣き桐野利秋と会談。 五月台湾征討 六月増田と共に共憂社を組織す。 八月天下の形勢を知る為、四国に渡り、土佐板垣退助（立志社）に会う。 九月柳田清雄は長洲、岡本は豊後に渡る。
一八七五	明治八	二四歳	六月九日依頼被免、祠掌辞任。 十一月十三日中津に田舎新聞第一号発行さる。
一八七六	明治九	二五歳	九月筑前秋月党 十一月長洲萩に前原一誠破らる。 中津藩士木村の女ムツ子と結婚す。
一八七七	明治一〇	二六歳	一月廿九日薩摩私学校生徒武器弾薬の奪回の為衝突。 一月廿九日早暁増田は三回目の訪薩より鹿児島出発。 二月四日夜豊前長洲の圓山嘉満屋で増田は鹿児島の帰途梅谷安良等と共に同志会し小宴あり。 二月中旬中津にて共憂社同人会に出席。 二月十八日一度赤尾に帰りし千座再び出発す。 三月田原村激戦。

三月十五日増田同志数十人と共に黨薩を議に出席。
二十日田原坂破る。
黨薩党各地に起つ。熊本三、人吉隊、延岡隊、飫肥隊、高鍋隊、福島隊等、熊本に向う。
三月廿七日福岡党起つ。この報三一日中津に入る。
三月卅一日中津閣無浜なる山田元七方に同志召集さる。
今夜十二時を期して後藤純平の宿処桜町松野屋に集合。旧城内支廳を襲い、大分に向うことを決定。
同夜集合者五十八名、宇佐郡よりは本好千座一人である。
四月一日千座戸籍より、脱籍。
四月一日午前四時中津を出発して大分に向う。
笠松村にさしかゝるや千座は、単身はなれて赤尾に寄り、両親及、妻女ムツ子に訣別の辞を与う。
午前八時頃四日市に着。夕暮立石出発。
四月二日午前二時頭成着。二隊に分る。一藤梅谷長となり日出より海路大分に進む。
大分城攻撃。
夜築摩宋太郎以下十二名新に加わる。
三日払暁大分城攻撃を中止し浜脇を発し石垣原南境を通り、鳥居に出で川上村字岳本に達し、人夫数十名馬三十頭を徴発し玖珠郡森を経て日田に出ると称し湯の平に出る。
西南肥後に向い玖珠に、飯田高原を西に南山田村中嶽の南麓を通じ豊肥の国境を越えたるべし。

四月四日未明阿蘇郡小国村に入り
〃　午後宮ノ原に突入
〃　〃　市ノ原に突入
〃　夜南小国村に入る。南行山田村に入り、険を越え小国街道に出る。
四月五日小国街道を南進し、薩将佐藤三二の哨兵に会ひ、尾石村に入り、大津にて野村、六日二本木に西郷に謁す。六日佐藤三二にあう。中津隊入る。大津に在、七十五名。
四月七日薩軍命により大津に陣す。司令野村の下に入る。
一ヶ小隊「中津隊」と称す。
四月十日本好播摩、千座の死亡届を出し、戸籍改む。
十四日宇土より山川中佐突入、包囲をひらく。
四月十六日官軍大津に来襲
四月廿日健軍大戦大津に戦う。
廿一日勇名をはせ白糸村大字犬飼に陣す。三日間
四月廿二日西郷二千の兵をつれ浜町をすて阿蘇郡小峰村、尾野尻に達す。
三日尾野尻を発し黒崎より日向に入り鞍岡に着。今日桐野に従い犬飼を発す。
四日馬見原より日向に入り鞍岡に達す。
五日鞍岡より小崎廿六日椎葉村に入り小崎に達す。
六日小崎より肥後に入り球摩江代に達す。
廿八日球摩江代会議にて寄兵隊豊後進出をなす。今日江代を発し湯立川村に達す。

一八七八	明治一一	滞陣 九日江代発 五月三日中津隊、江代を発し日向椎葉村小崎に達す。 五日中津隊小崎より財木へ立つ。 五月五日中津隊財木より三ケ村坂本、小戦中津隊負傷五名。 五月十四日三ケ所村鏡山戦年 廿四日三ケ所村男坂戦争敗退。 六月一日西臼杵郡岩井村大楠に達し塁を築き拠る。十九日に到る。 六月二十日延岡在陣野村忍介の命より大楠を発し延岡に向う。 六月二十一日増田延岡本営にて野村等と豊後進出の軍議 六月廿二日野村と共に延岡を発し熊田に達す。 廿三日熊田出発本営軍議夜進軍。 六月廿四日赤松谷戦争、切込谷に戦うて勝つ。本好千座外四名戦死、負傷九名。 六月廿五日同志十三名の死傷者を擁して川舟に乗り熊田を発し北川を下りその河口東海港に達す。死骸はその地に葬りしならん。
〃		二六・七日休養 九月四日増田、梅谷、中津隊全員戦死増田二十九才（米倉） 九月廿四日城山陥落。 千座長男生るれど三十三日にして死す。ムツ子は木村家に復籍す。 父本好求馬（播摩守）その霊を弔わん為に遺跡を問う。不明にして寺僧十六名の弔いの時本好ありというのみなり。 弟武十郎赤尾遠元墓地へ建碑す。
一八八〇	明治十三	

一九四六　昭和二一

九月廿四日中野幡能、伝を書き終る。

附記　本稿は戦時中に関心をもちながら集めていた資料を、復員直後栄養失調の身体を療養の遊びに書いた『志士本好千座伝』である。わずか一週間許りで書きあげ、推敲もしないまゝ筐底に収めてあつたが、明治百年を記念して西南役無名の志士を紹介するのも、あながち無意味ではあるまいかと思つて、あえて原書のまゝを活字にさして頂いた。不備を御許し頂きたい。本稿作成に協力して頂いた本好氏の一族とくに本好きくの氏に感謝申したい。